２０１５．１１．２２．鹿児島県児童クラブ連絡協議会ブロック別指導員研修会

「指導員の専門性を磨くために」
～認定資格研修を控えて～

さいたま市見沼小学童保育どろんこクラブ第２
片山恵子

はじめに

◎わが子の小学校入学後も安心して働き続けたい。自分が働いている間、わが子が不安でさびしい放課後を過ごすのでなく、安心の中ですごしてほしいという親の願いが、何もないところから学童保育を産み出し、長い時間をかけて社会を動かしてきた。
→1997年　学童保育の法制化

◎先輩たちは、今よりもっと厳しい、ないない尽くしの厳しい状況の中でも、連絡協議会を中心に指導員同士の横のつながりを作り、交流しながら研修内容を向上させてきた。
実践を通して、指導員の仕事内容を確立させてきた。
その長年の積み上げが『指導員はボランティアでいい』『子どもは見ているだけでいい』という指導員の仕事への認識を変化させてきた。
→　2007年　放課後児童クラブガイドライン策定

→　2015年　「子ども・子育て支援法」と「児童福祉法」改正
　　「設備運営基準」と「放課後児童クラブ運営指針」の策定
指導員は「放課後児童支援員」という資格が必要となる。
都道府県が、指導員を対象に認定資格研修を実施する（5年間）
「放課後児童クラブガイドライン」を「放課後児童クラブ運営指針」に変更
学童保育の目的・役割・保育内容、指導員の仕事内容の「望ましいあり方」が示された。
法律の附則に「指導員の処遇の改善、人材確保の方策を検討」が盛り込まれている。
対象児童を6年生までに引き上げ。施設の広さ、集団の規模、指導員の資格、配置基準が定められた。
すべての市町村を対象に指導員の資質向上に向けた現任研修のための補助金を予算化

◎初めから今があるのではない、やっとここまで来た。さらに充実させていくために、今かかわっている私たち指導員が、もっともっと、わかりやすい言葉で仕事内容を語り、社会的理解を得ていくこと→　劣悪な条件を改善させていく力になる。

≪働く親の願いと学童保育≫

自分たちが働いている間で、我が子が不安で心細い放課後の時間を過ごすのは心配。安全で安心できる放課後の生活を送ってほしい。　昼間、我が子をみることができない保護者が、私たち学童保育指導員に託しているものは何か。

我が子がいけないことをしたときにはきちんと叱ってほしい。
我が子の様子が変だと思うときには、具合を見てほしい。
我が子にうれしいことがあったときには一緒に喜んでほしい。
我が子がさびしそうにしているときには気遣ってほしい。
などなど、我が子に何かあったときにそばに寄り添って、適切な手立てをとってほしい。
そして親に伝えてほしい。
要はちゃんとみてほしいという、ごくごく当たり前の願い。

≪指導員の仕事≫

そんな保護者の願いを受けとめながら、学童保育に帰ってくる子どもたち一人ひとりが安心して生活できるように、一人ひとりの違いや思いを大切にしながら、子ども達と一緒に学童保育の生活をつくっていくこと。そのことを通して保護者の労働を保障する。

そのために、心地いい人間関係を作り上げていく。指導員と子ども、子どもたち同士がいろいろな出来事を通して、少しずつお互いの違いを受け入れ、わかりあっていく。どの子も一人ひとりが大切にされること。

これは生半可な仕事ではない。じっくり時間がかかるがこの過程が大切。この営みそのものが実践であり仕事の中身である。

この営みは指導員の仕事として行われるわけだから、指導員には常に自分の仕事を振り返り、検証し、より高めていくことが求められている→専門性を磨く

≪指導員の仕事の基本≫

◇働く親への共感的理解の立場に立ち、働きながらの子育てを励ます
◇学童保育に通う子どもを理解する
◇留守家庭の子どもへの理解
◇子どもの成長・発達に対する理解と確信を持つ
◇学童保育以外の専門機関・施設との連携
◇学童保育をよりよくしていく

≪指導員の仕事の基本と、専門性を高めていく上で必要な知識・技能≫

①学童保育に対する親の願いと学童保育の役割の理解
②小学生期の子ども理解

③留守家庭の子どもへの理解
④「放課後（および学校休業日は朝からの一日）」という生活に対する理解と、この領域・分野に関する知識・技能
⑤集団での生活をよりよく組み立てることにかかわる知識・技能
⑥家庭との連携、学校・地域と連携に関する知識・技能
⑦「生命と生活を預かる」うえでの基本的な知識・技能
⑧「子どもの放課後の生活に責任を持つ仕事という」自覚と責任感

≪働きながら子育てをする親を励まし支えるために―学童保育での子どもたちの生活の様子を伝えることを仕事の根幹にすえる≫

☆　伝えるときに大切にしたいこと

伝えるの手段は、ことばで

＊学童保育を選択していることを信頼する。

＊子どもを否定しない。親を否定しない。

子どもの姿は親にとって一服の清涼剤。指導員自身が子どもたちが引き起こす子ども時代ならではの失敗、悪さ、いたずら、バカさを大らかに受けとめる。子育ての困難を抱える親の悩みやもがきを信頼し、心を寄せる。

＊伝える中身は指導員の仕事の範疇という構えで伝える。親に責任を転嫁するような伝え方はしない。事実の羅列だけではなく、指導員がどうとらえ、どう関わったかを伝える。

一人ひとりが親にとってかけがえのない子であり、どんな子どもでも長い目で見守れば必ず成長していくという子どもへの信頼と、いろいろ問題行動を引き起こすわが子を見捨てないで、誠実に向き合ってくれている指導員の姿が見えていることが、親の安心につながる。

とくに気になる子どもの言動などを伝えるときには、その子に向き合う指導員の生身の姿と子どもへの見方が伝わらないと、親は突き放されたような気持ちになる。

＊親からも子どものことを教えてもらえるように、親の話に耳を傾ける（愚痴や苦労話も）。

親と指導員が子どものことを共に考えあい、育てあうことも、子どもと指導員がわかりあって、子どもにとって学童保育が安心できる居場所になることも、最初からできているわけでもないし、一朝一夕にできることではない。

日常的な伝え合いの中から、お互いに信頼を深めていくもの。
日常的な伝え合いをしないで、問題が起きた時だけ伝えて、共に考えあうというのは、土台無理なこと。

指導員はお便りを定期的に出したり、父母会などで子どもたちの日々の生活を伝えることはもちろん、行事のときやお迎えのときのちょっとした立ち話、電話なども、親と指導員がお互いにそれぞれの子どもに寄せる思いや願い、その人を理解することにつながる。

子育てと働くことの両立を願う親にとって、子どものことで伝えあい、一緒に考え合える指導員の存在と親仲間の存在は、とっても頼もしい味方。

≪子ども理解を深めるために—事例検討≫

子どもは正直者なんていうが、どっこいそうとばかりは言えないこともある。
子どもが表面に表す言葉や行動の奥に、別の本心が隠されていることが多々ある。

心配ごとやつらいことを抱えていても、わざと明るくふるまったり、やたらとはしゃいでみたり。言葉で表現できない分、乱暴な行動や、友達への意地悪で自分の心の均衡を保とうとしたり。子どもは子どもなりに一生懸命なのだが、私たち大人には理解しがたい言動となって表れてくる。

そんな子どもの言動に指導員だって深く傷つき、心が折れそうになる時もある。
実践上のつらさやしんどさを認めあえる職員関係をつくる。指導員自身の感情を大事にしながら、でも、感情レベルでの仕事で終わらせないこと。事例検討をし、子どもの捉え方を深めていくこと。

☆実践記録と検討は、自分たちの子どもを見る目を鍛え、より豊かにし、実践の力量を高めていくための、最も効果的な方法—自分の実践の意味づけをすることはこの仕事に対する確信につながる

☆チームワーク

困難をチームとして乗り越える。そのために日常的な打ち合わせ、連携を大事にする。

「子ども時代ならでは」を大切に

～トラブルは他者理解の教材に～

片山恵子（さいたま市「見沼小学童保育どろんこクラブ」指導員）

子どもたちの音読を聞き、計算の答え合わせを一緒にする片山さんは指導員歴32年。

全国で八〇万人以上の小学生が、放課後や長いお休みの間を過ごす学童保育とは、どんなところなのでしょう。

無理が通れば

四月、一年生だけの午後。男の子たちが数人でサッカーをして楽しく遊んでいた。突然、ガクがゲームを止めて主張する。「ノーノー、今のはノーゴール、ノーゴール。だって今のはキーパーの手に当たってから入ったのだから、オウンゴールっていってゴールにはならないよ」

サッカーを習っているガクは専門用語を使って、相手チームのゴールを認めようとしない。ガクは、他の一年生たちよりずば抜けて背が高いし、力も強い。力の強さで無理を通して、相手をねじ伏せて、結局周りの子たちを泣き寝入りさせてしまうのだ。このときも同じ保育園出身のケイスケが顔を真っ赤にして、首筋に血管を浮かび上がらせながら、激しくしつこく抗議するがガクは聞き入れない。からだの小さいケイスケが、いくら自分に立ち向かってきても、口でも力でも自分を打ち負かすことができないことをガクは心得ている。

私が出て行ってガクを注意する。

「ガク、今のはゴールだよ」と。ガクは今度は私に「カタセン（私のこと）、サッカー習ってないくせに口出ししないで!!」と激しく鋭く切り返す。「サッカー習ってないやつはものを言うな」の言い方にカチンときて切り返す。

「サッカー習っていないけど、カタセンはガクより何倍も何倍も生きています!! だから、ゲームもガクより何倍も見てきました!! だからそれくらいのルールはわかります!!」

私は大人げないが、ガクの勢いに負けないように、ガクと同じように顎を突き出して、相手が頭にくるような言い方をして見せた。私とガクは五二歳の年の差があるが、私も必死で向かう。

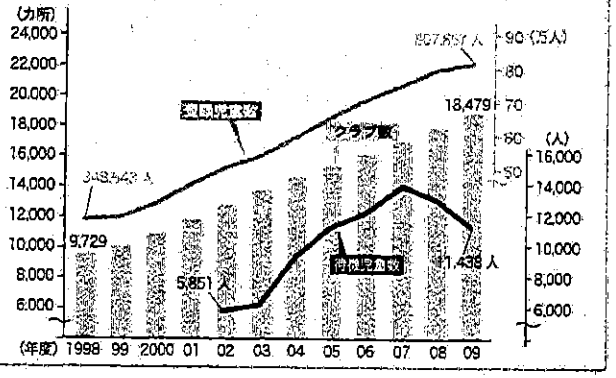
ガク「じゃあ、マンチェスターユナイテッドのロナウド選手の背番号言ってみろよ!!」

片山「背番号なんか知らないよ」

ガク「知らないじゃんかよ！ 知らないくせに口出しするなよ」

片山「はあ？ 今は背番号の話じゃなくて、ルールの話です。ゴールキーパーの手をはじいて入っても、ゴールになります」

私が譲らないのを見て、ガクは思い切りの膨れっ面を見せてしぶしぶ主張を引っ込めた。子どもたちは安心してサッカーを再開した。保育園時代の力関係をそのまま持ち込んでくるガクも、周りの子どもたちも、これから否が応



学童保育は戦前より始まり、1998年の児童福祉法改正で、放課後児童健全育成事業、子育て支援事業として法制化された。現在は全国の約9割の自治体で実施。しかし待機児童が依然1万人以上いる。経営は公立公営42・3%、公立民営40・4%、民立民営17・3%。（グラフは厚生労働省09年10月28日発表資料）

2014年度実践記録

子どもへの信頼を見失わないために

見沼小学童保育どろんこクラブ第2
片山恵子

◎そうはわかっていても

「カタセン、今悠平（3年生）が堰を切ったように泣き出して、とりあえず気持ちを落ち着かせるために和室に連れていっているんですけど」と、動転した福島指導員が私を呼びに来た。

和室に行ってみると悠平が激しく泣きじゃくっていた。なりふり構わず手放しで泣いている。こんな悠平の姿は初めて見る。いったい何が起きたのか。

福島指導員が説明してくれる。

『京平（3年生）に嫌な事をされたのだとか。今日だけでなく2年生の時にもひどい意地悪をされていた。自分だけでなくて怜音（3年生）もやられていた』らしいと。

私は自分たちが知らないところで、そんなことがあったのかとドキっとした。事実を確かめるために怜音を呼んだが、怜音は何の事だかさっぱりわからないという顔をしている。悠平によく聞いてみる、京平が先に走って帰って、置いて行かれたことがあったのだと言う。私は深刻ないじめでなかったことに少しほっとしていた。怜音はその話を聞いて「そういうこともあったかも知れないけど、今は何とも思っていない」と言う。

それで悠平にもっと話を聞いていくと、その日ゴミ箱にカナヘビのウンチがついたティッシュが捨てられていて、それを京平につけられたことに大憤慨していることがわかった。それは頭にくる、悠平の怒りは最もだ。悠平はあまりに悔しくて、2年生の時の嫌だったことがよみがえってきたのだろう。

そこで京平を呼んで、私が悠平の怒りを説明した。京平は顔に動揺の色が出ているにもかかわらず「まあ、怒るだろうね。まあ、そういうこともあったな」なんて他人事みたいに言ってうそぶく。

片「京平さあ、京平は自分がやられた時にはものすごく大騒ぎをして、絶対に許さないじゃん。そんな時ものすごく怒っているでしょ」

京平「まあそうだろうね」

片「悠平がこんなに泣くなんて珍しいでしょ」

京平「おれ、悠平を泣かせたの一回だけじゃないよ。二回はあるな」

片「今何回泣かせたかの話をしているんじゃないよ。悠平はカナヘビのウンチをつけられたことがとっても嫌なことだったんだよ。それはわかるでしょ」

京平が頷き始め、言葉でも認め始めた。私は話をここまで持ってくるのに、ギリギリギリギリ怒りを爆発させないように自分を抑えていた。

片「悠平、京平は自分がやったことは悪いことだとわかったって言うからこれでいい？」
悠平「いやだ！今までやったことを全部謝ってほしい！！」
普段は本当に穏やかな悠平が激しく絞り出すような声できっぱり言った。私は、その激しさに驚いた。そして悠平も大きくなってきているんだなとちょっと感動していた。
京平もおとなしかった悠平の激しさに驚いたと思う。でも、後は京平に任せるしかない。私たちがいると京平は素直に言えないだろうと思って、二人を残して和室を出た。
しばらくして京平が和室から出てきて、頭の上で大きく丸を作って高揚した顔で私の方を見て「許してくれた」と言った。
自分が後先考えずに衝動的にやってしまったことで悠平がこんなに傷つき、激しく怒っている。謝らないといけないけど、でもどうしよう。そんな揺れる気持ちに向き合いながら、やっと謝ることができた。そして悠平が許してくれた。心の底からホッとしている京平の気持ちが伝わってきた。京平が何も感じていないわけではなかった。この時の何とも言えない顔が私の心に焼き付いている。

こんなことがあったのに、また同じような事を繰り返す。学校から帰ってきた京平が、ランドセルをとても乱暴にテーブルに叩きつけるように置いた。テーブルが壊れるからそういう置き方はやめてと注意する鶴岡指導員に、「はあ！？いいじゃん！壊れたっていいじゃん別に！」と京平が平然と言い返し、挑発するようにランドセルの留め具部分をもっと乱暴にテーブルにぶつけ続ける。
学童の物だから壊れていいわけがないと叱る鶴岡指導員に対して、感情を逆なでするような言い方で返す。激しいやり取りの後、京平は厚かましくそのまま宿題を広げようとした。とうとう「ここで宿題をやるんじゃない！やらないで！」と鶴岡指導員が切れてしまった。京平は宿題を持って外へ出ていった。顔には少し動揺の色が出ていた。
しばらくして、私が外に様子を見に行くと、京平は霧雨の中、軒下に正座して宿題を広げていた。
「そんなところでやると、ノートもズボンも濡れちゃうよ」と声をかけると、「きもいからあっちへ行って」と返してきた。『はあっ！？』。私はムカッとする気持ちを抑えて続ける。

「キモイって誰に言ってるの？」
「カタ（私のこと）！」
「キモイって言われてうれしいと思う？カタはそれ言われてすごい嫌だ。京平のお母さんがお迎えに来た時に『キモイから帰って！こっちに来ないで』って言ったら喜ぶかなあ？」
「まあ喜ばないだろうね」
「でもカタもやるよ」
「それは困る」

「京平は相手が嫌な気持ちになるのがわかっていてそれを言ってるでしょ。お兄ちゃんもお家でお母さんにひどいことを言っているんだって？お母さんから聞いたよ。京平はそういうのを見てどう思ってるの？」
「お兄ちゃんはせこい」
「京平がやっているのはお兄ちゃんみたいなことだよ」
以前父母会の後、京平のお母さんが反抗期の兄とやり合って悔し涙を流している話を、愉快に話してくれたことがあった。大好きなお母さんのことをやりこめる兄のことを、京平が陰で怒っている話もその時に聞いていたのだった。
京平は素直になりかけながらも「お兄ちゃんはスマホ持ってるし、せこい」と、話をすり替えてくる。

「京平、さっきのツルちゃんとのこと悪かったと思うのなら謝った方がいいと思うよ」と言うと、「謝れない。でもそういうことはもう言わない」と言うので、悪かったと思う気持ちがわかってそれ以上は追及しなかった。
そこに山内指導員が通りかかったので、京平に聞こえるように「山ちゃん、京平は今謝れないっていうけど、悪いことだとわかっているみたいだから、そこがわかってくれたらいいよね」と話をしていると、京平が「謝りたくないっていうか、謝らないといけないと思っているけどね」と、素直に本音を言う。
本当はわかっているのにその場の勢いで素直になれない京平なのだ。京平にはこんな事例が呆れるくらいにいくつもある。

別の日、私はお迎えに来たお母さんとすれ違った時に、興奮気味に「お母さん、今度ゆっくり話すね。今３年生たちがすごいよ」と話すと、お母さんは「(父母会で) 5、6年生たちの話をいっぱい聞いてきたから、うちの子もいつかはと思っていたけどね」と言い、私も「それにしても早すぎない？」と言って笑いあって別れた。

そうはわかりながらもその場その場で対応しないといけない私たち指導員も大変だ。鶴岡指導員だって、カーッと感情的になってしまって後に引けなくなって、同僚の私が京平の様子を見に行ったことを心苦しく思い、感情的な対応をしてしまった自分を責め、そんな自分をふがいなく思い、情けなくなって落ち込んでしまう。

だから私たちは日常的に、子どもへの対応だけでなく自分たちの感情をお互いに否定しないで交流することを大事にしている。自分の失敗や弱さを直視するのは苦しいが、そこに止まらないで指導員間の情報や意見交流を積み重ねながら、その時の子どもの気持ちに迫っていく。そうすることで、私たちの子どもの捉え方も深まっていく。
私は『どろんこ（クラブ通信)』に「今、3年生のエネルギーがものすごいです。こうし

て何度も脱皮をくり返していくのでしょうが、そこに向き合う私たちも多大なエネルギーが必要になっています」と書いて、大きくなろうとしている３年生の状況を伝えてきた。

◎一体どういう神経をしているのか

同じ時期、やはり３年生のたくちゃんのひどい言動に出会う。

ある時気がつくと、怜音が胸を押さえて苦しそうにうずくまっている。私はカウンターの中から飛び出して怜音のそばに行った。怜音は私の腕にしがみついて痛みをこらえている。体が震えている。泣き声も出ないくらい痛がっている。どうやら、なにかにつまずいて机の角に胸をぶつけてしまったようだ。その怜音の姿を見てたくちゃんが笑っている。

すこしおさまって、私が怜音の洋服を持ち上げて怪我の具合を見ていると、たくちゃんがまた「怜音の胸変なの」とか言って笑っている。側にいた６年生の悠介が「今そんなことを言うな！！今そんなことを言う場面じゃないだろう」と、怒っている。

私は、はじめは怜音がうっかり何かにつまずいたのだろうと思っていた。子どもたちもそう思っていたのだが、たくちゃんの足につまずいたらしいということになった。でもその次に、たくちゃんががわざとに怜音の前にひっかけてやろうと足を出したのだということがわかった。たくちゃん自身が悪びれもせず、わざとだよと言った。

幸い怪我はなかったが、その後のたくちゃんの一連の態度を見ていたから、私も子どもたちもたくちゃんの意図的な行為だったということに驚いた。みんなが呆れてしまっている。それでもたくちゃんはへらへら笑い続けている。

怜音だけは初めからたくちゃんの故意の行為だとわかっていたようで、まったくたくちゃんの方を見ようともしないで怒りを表していた。

私はやってしまったことよりも、その後のたくちゃんの態度が許せなくて、たくちゃんと向き合って話を始めた。なかなか自分の行為を見つめようとしない態度に、私は怒りを通り越して情けなくなっている。こんな態度を取り続けられることが信じられなかった。

「たくちゃん、これが目とかに当たっていたら大変な事になるんだよ。たくちゃん責任とれるの」

「はあ？！目とかに当たっていないじゃん」

「たくちゃん、うっかりのことじゃなかったでしょ。わざとに足を引っ掛けたんだから、これでけがをしていたら、もう犯罪だよ。でもたくちゃんは小学生で責任とれないから、たくちゃんのパパかママが責任をとることになるんだよ」という話までしたところで、やっとたくちゃんがぽろぽろ泣きだした。たくちゃんもそうだが、家族のことはとても大事に思っている。

それでもさんざん開き直った言い方をしながら、サッカーの習い事の時間になって、ユニホームに着替えて出かけようとする。

山内指導員がドアの前に立ちふさがって「たくちゃん謝ったの！！」と叱る。怜音の方を見ようともしないで、口の中でぼそぼそ言って「謝ったよ！！はい謝った！！」と言う。

『えっ、こんな子だっけ？信じられない』。悲しささえこみ上げてくる。

山内指導員が「そんなの謝ったうちには入らない！！」と叱ると、癇癪を起しながら「言えって言ったから言ったんじゃん！！」と、逆切れする。それでもサッカーに行こうとするたくちゃんのリュックサックを山内指導員が引っ張って止める。私も思わずたくちゃんの後ろ姿に「警察呼ぶぞ！わざとなんだから犯罪だよ！サッカーなんか行かなくていい。お前にはサッカーを上手になる資格がない！」と怒鳴る。

するとたくちゃんはリュックを床に投げつけて、そこにあったダンボールを乱暴に踏みつぶしている。『一体何なんだ！？』。

山内指導員が「なにキレてんの！！キレたいのは怜音の方だよ」と叱ると「じゃあ、怜音もキレればいいじゃん！」と、もっと逆切れして「怜音も怒ればいいじゃんか！何で怜音が怒らないんだ」と言う。

片「怒っているよ！だからさっきからたくちゃんの方を見ないんじゃないか！」

片「たくちゃんが同じことをされたら、たくちゃんのお母さんだって怒ると思うよ」

二人で必死になってたくちゃんと言い合い、そのうちにたくちゃんは部屋の中を歩き回りながら少し落ち着いてきた。

それから、怜音のそばに行って泣きながら謝って、怜音も頷いてくれた。

大人二人がかりで、たくちゃんと必死に言い合った。それでも、私はたくちゃんの態度が解せなくて、信じられなくて、どっと落ち込んでしまった。

このことを双方の親にどう伝えようかと何日か考えていたら、たまたま怜音のお母さんが用事で立ち寄った。急いでいるようだったので「怜音のママ、今度時間がある時にお話ししたいことがあるんだけど」と切り出すと、お母さんが「何のこと？」と聞いてきた。

「この間たくちゃんと、」と言いかけたところで、せっかちなお母さんが遮って「あ～、あのこと！？たくちゃんのママから謝罪の電話があったよ」とケロッと言う。驚いて尋ねると、あの日たくちゃんは泣きながら、自分からお母さんに打ち明けたのだとか。怜音のお母さんは「あのたくちゃんが自分の方から言って来ただなんて余程だったんですね」と言って笑う。

怜音も同じサッカー少年団ということもあるが、3年生の保護者は父母会や行事で顔を合わす機会が多く、親しい間柄にある。

単純な私は、怜音のお母さんの話を聞いて、たくちゃんが何とも思っていなかったわけでないことがわかってホッとしていた。

後になって考えたことだが、私だって怜音のしがみつき方に、ただ事ならぬものを感じていたから、たくちゃんだって自分がいたずら心でやってしまった結果に慄いていたのかもしれない。その恐怖を、突っ張ることで紛らわしていたのかもしれない。そして一人で抱えきれなくてお母さんに打ち明けたのかもしれない。

数日後、学童に立ち寄ったたくちゃんのお母さんにも、怜音事件の中でたくちゃんに対

する私のつらかった感情を正直に話した。たくちゃんが何とも思っていなかったわけじゃないことがわかって、やっぱり子どもは信頼できるんだとうれしくなったという話もした。お母さんも私もお互いに少し涙ぐんでいた。

そして「ほんとに子どもは何をやってくれるかわからないから」と笑いあった。

後日談になるが。

たくちゃんには中１の兄がいる（２０１３年度実践記録・伝え合いながら子どもを見守る～トラブルに直面しても～)。兄も６年間在籍していた。指導員たちと時間をかけた関係があっての兄の絡み方を、たくちゃんはそのまま自分も真似しているところがあった。正直、面倒くさいと思う絡み方に私たちは戸惑いを感じていた。おまけにたくちゃんも習い事で忙しく、学童で丸々居られる日は金曜日しかないため、たくちゃん自身もやりたいことが中途半端なままになり、いつも苛立ちと諦めを抱えていた。忙しさに不満を言うことはあっても、我慢してやりきることがいい子なんだと本人は思っている。そんな状態を気の毒に思いながらもじっくりかかわれる時間はあまりなかった。

それが初めて、私も山内指導員も感情丸出しでたくちゃんにぶつかり、たくちゃんの方も感情丸出しでぶつかってきた。

そのことが良かったのか、「あれ以来、たくちゃんが素直に感情を出すようになったんじゃないか」と、職員間の話題になっている。お兄ちゃんの真似でないたくちゃん自身の関わり方をしてくるようになったのだ。怜音事件の副産物でもある。

◎信頼関係って

６月上旬のこと。ものすごい大きな音がして振り返ると、６年生の岳がすごい形相で５年生のアユキを睨みつけている。一生懸命ドミノを並べていたアユキのところに、岳が使っていたボールがうっかり転がってしまったことからのトラブルだった。さっきの音はアユキの罵声にカッとなった岳が、アユキをめがけてキャンディーボールを投げつけたのが壁に当たった音だった。

側にいた相米指導員が岳のそばに駆け寄って注意をしている目の前で、またアユキの頭をぶつ。それでもまだ気が収まらなくて、キャンディーボールでアユキの顔面をぶった。そこから、相米指導員と岳の話し合いが始まった。

私は離れた所から二人の様子を気にかけていた。相米指導員は声を荒げない。静かな話し合いだったが、二人の間に緊迫した雰囲気がある。とても長い時間がかかっている。時々相米指導員の声が聞こえてくる。岳が涙ぐんでいるのがわかる。

私は岳がこの長い話し合いを投げ出さないでいることに妙に感動していた。岳は気持ちは通じる子なのだが、短気で深く考えることを面倒がる子なのだった。

結局この時は岳が最後まで納得しない形で終わってしまったそうで、相米指導員は子どもたちが帰った後、「うまく行きませんでした」と少し落ち込んでいた。

そんな相米指導員に「でも私は、岳が最後までうんと言わなくても、あの話し合いは良かったと思うよ。あの岳が、あの長い話し合いを投げ出さなかったんだからよかったんだよ」と私の実感を伝えた。

6 月末の月曜日。岳が宿題をしながらしつこく私に話してくる。「ねー、これが終わったら人権作文だから」をくり返す。私は深く考えもせず「ふーん、大変だね～。がんばってね」と取り合わなかったが、岳がまた「ねー、これが終わったら人権作文だから」と言ってくる。私に手伝ってほしいという意味であったことにやっと気付いた。

そこから二人の作文ロードが始まる。原稿用紙 3 枚をびっしり埋めないといけないそうだ。岳の最も苦手な宿題だ。

片「岳は『人権』て、どういうイメージがあるの？」

岳「うーん、いじめとか」

片「岳の周辺でそういうことがあったの？」

岳「ない」

片「それじゃあ具体的な事実がないのに、原稿用紙３枚も埋められないよ」

岳「『人権』てなんなの？」

片「人として大事にされる権利だよ。それは傷つけることもいけないし、傷つけられちゃだめなものなんだよ」

５年生後半くらいから岳は、自分がカッとなった時、相手に対してそこまでやるかというようなことをすることがあって気になっていた。

11 月、特別支援学級の陽菜（当時２年生）に罵声を浴びせ蹴ってしまったことがあった。私もそばにいたので陽菜のしつこい行為に対して、岳が憤慨する気持ちはわかったが怒り方が酷い。私が顔色を変えて厳しく叱っても、カッとなっている岳は「いいんだよっ！」と、ちっとも響かないで怒った顔で取り合わない。「よくない！じゃあお前の妹が入ってきた時、おんなじ目にあってもいいんだな」と脅しても、鋭い目つきで私を睨み返して遊びを続行する。

私が休んでいた１月上旬にも、第１学童から異動してきたパートの福島指導員にカッとなって飛びかかって踏んだり蹴ったり叩いたり、ひどい行為をしたことがあったそうだ。翌日の職員会議で振り返ったが、岳の行為は遊びの中で生じた自分の憤りを、一緒に遊んでいた同級生の颯人でもなく、一学年上の太陽でもなく、高校生 OB の祐介でもなく、一番馴染みの浅い福島指導員にぶつけたとしか思えなかった。

こんなこともあって、いつかしっかり話をしたいという思いがあったのでチャンスだと思った。

片「岳はさあ、カッとなるとひどいことすることあるじゃない。ずっと前は福ちゃんにもやったでしょ」
岳「えーっ、覚えていない」（ごまかしている）
片「アユキの時もそうだったじゃない」
岳は「あ～っ、オレそれ書くわ。それなら覚えている」と言う。
そこからあの時のアユキとのことを聞きだして行った。アユキに対してカッとなったいきさつや、相米指導員が来て話をしている時も気が静まらなくて頭をぶったこと、その後顔面をぶったらアユキが泣きだしたこと、そこまでは事実を正直に話し、書き綴っている。
片「ソウ（相米指導員の呼称）は何て言ってた？」
岳「う～ん、謝り方とか」
片「カタは、『そういう気持ち（カッとなったままひどいことをやること）を、抑えるようにした方がいい』って言っているのが聞こえたよ」
片「でも妹がされたらぶっ殺すって言ったんでしょ。それは何で？」
それには答えない岳。岳は１年生の妹をとっても大事にする。自分のことよりも大事にしているくらいだ。
片「岳さあ、ソウと長い時間話し合ってたでしょ。それでも最後まで『わかった』って言わなかったじゃない。でもカタは深く考えるのが苦手な岳が、投げ出さないで最後まで真面目に話しあっていたことがすごいと思ったし、うれしかったよ。それはソウもうれしかったって言ってたよ。ソウも何回か泣きそうになったんだって」
岳「うん、オレあんなに長い時間話し合いをしたのは生まれて初めてだな」
片「あれでソウのことを嫌いになった？」
岳「ううん」
片「話し合いが嫌だと思った？」
岳「ううん」
片「じゃあさあ、そのことも書いたらいいと思うよ」
岳は話の途中で涙をごまかす場面もあったが素直にうなずいていた。そして話し合いの場面を振り返りながら、「こういうことを話し合うことが、人権について考えることにもなってよかった」と締めくくって宿題を完成させた。スカッとした笑顔の岳だった。

私は相米指導員と岳の話がそのままになっていたので、岳の気持ちを聞き出せてよかったと思った。そしてその話を相米指導員に伝えると、彼はホッとした顔をしていた。
相米指導員はあの時「うまく行かなかった」と落ち込んでいたが、私はその時点で解決できることばかりではないし、言葉巧みに話ができるとかの問題ではないと常々思っている。
むしろ私は、相米指導員がいっしょうけんめい真摯に話し合ってくれたことに、岳は信頼を寄せたのだと思っている。だから岳は話し合いを投げ出さなかったのだ。うまく行か

なかったことを、経験の長短に原因を求める指導員もいるが、そうではない。

私は「人と人がつながるってこういうことなんだ」「信頼関係ができるってこういうことなんだ」ということを目の当たりに見せてもらったような気分だった。すっかりうれしくなって、この場面も『信頼関係って』というタイトルで『どろんこ』に書いた。

後日、お迎えに来た岳のお母さんが私に近づいてきて、ニコニコ顔でお礼を言ってきた。

母「岳は金曜日から 3 日かかっても書けなかった宿題が、学童で 1 時間位で書けたと大喜びでした。それにしてもひどいことをやっていますよね」

片「お母さん、読まれたんですか？」

母「ええ、読みました。本当にありがとうございました」

その後、お母さんは相米指導員にも近づいていって「お世話になりました」と、笑顔でお礼を言っていた。もちろん相米指導員もとてもうれしそうだった。

「私たちはいい仕事をしているなあ」とうれしくなって、この時も相米指導員や鶴岡指導員と一緒にいつものお店で飲んで帰ったのだ。

新人の相米指導員にとっても、この仕事への確信を深める貴重な体験になったのではないかと思う。

これも後日談になるが、３月の卒所旅行で岳のお母さんからの手紙の追伸部分に、中学生になる息子に対して「いつかアユキ君には絶対に謝れ。謝ったら『大人』と認めてやる」と書いていた。岳が曖昧なまま風化させてしまいたいことに、お母さんが鋭く切り込んでいた。素敵なお母さんだなあとうれしくなる。

◎子どもへの信頼を見失わないために

私たちは子どものひどい言動に、心が折れそうになって苦しんでいる。こういうことが原因で、この仕事から離れていく指導員も少なからずいるだろう。

でも、本当の気持ちがわかった時がうれしくて、たったそれだけと思えるようなことで苦しさを忘れてしまって、やっぱり子どもっていいなあと思ってしまう。

投げ出したくなるような面倒くさいかかわりの積み重ねが、お互いにわかり合う関係を築いていくのだとわかっていても、ものすごいエネルギーを要するようになっている。子どもが置かれている状況が、ますます厳しくなっているのも要因だ。そういう社会の問題を見据えつつ、ますます子どものことを理解しようとすることが求められている。

それには同僚指導員たちとの連携・チームワークはもちろんだが、今書き進めている実践記録と、仲間たちとの検討をこれからもっともっと大事にしていくことだと思っている。